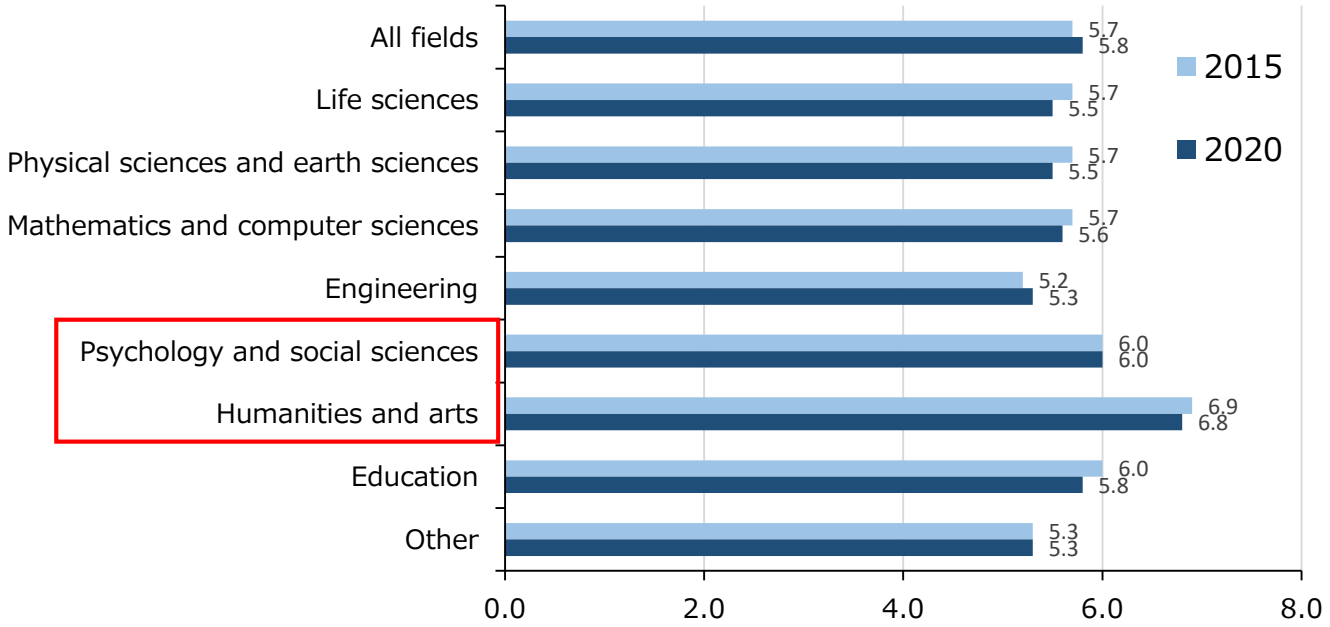
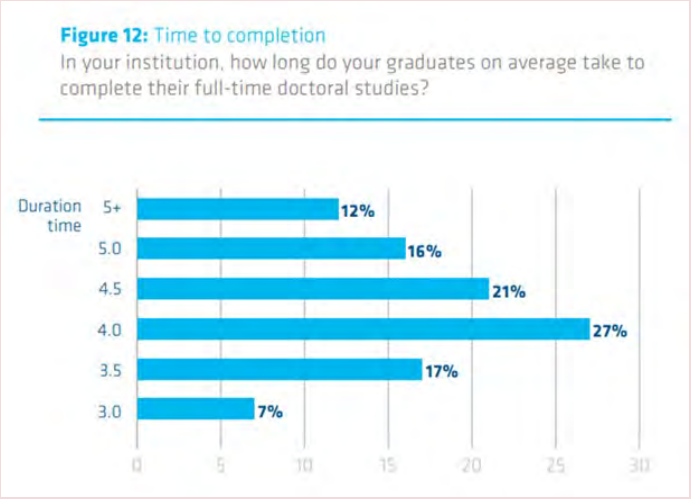
海外の事例

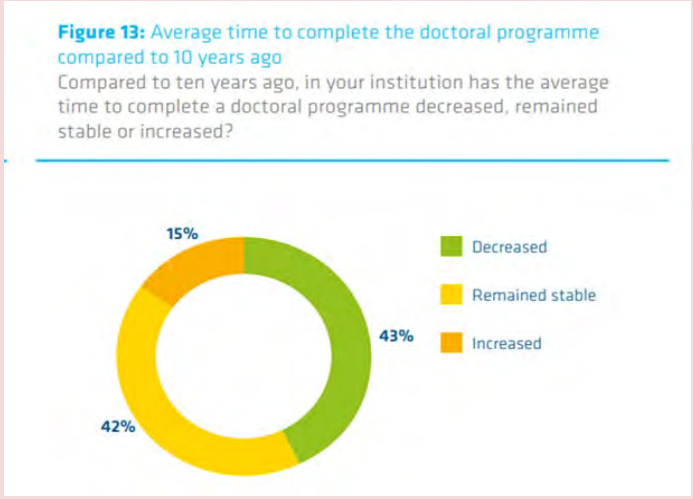
米国大学における博士課程プログラム修了（博士号取得）までに要する期間



- 米国の博士課程での博士号取得までの平均年数は、2020年において全分野では 5.8年となっており、Psychology and social sciencesにおいては 6.0年、Humanities and artsにおいては 6.8年となっている

【出典】Survey of Earned Doctorates（NSF）のデータを基に文部科学省が作成

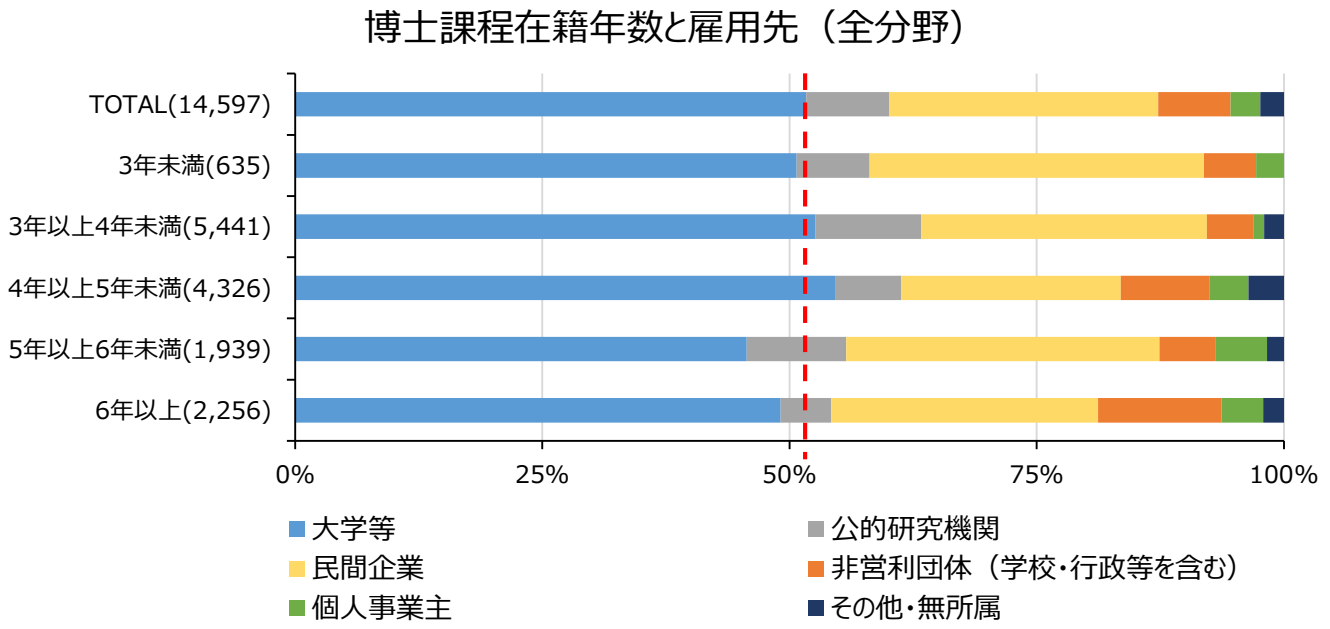


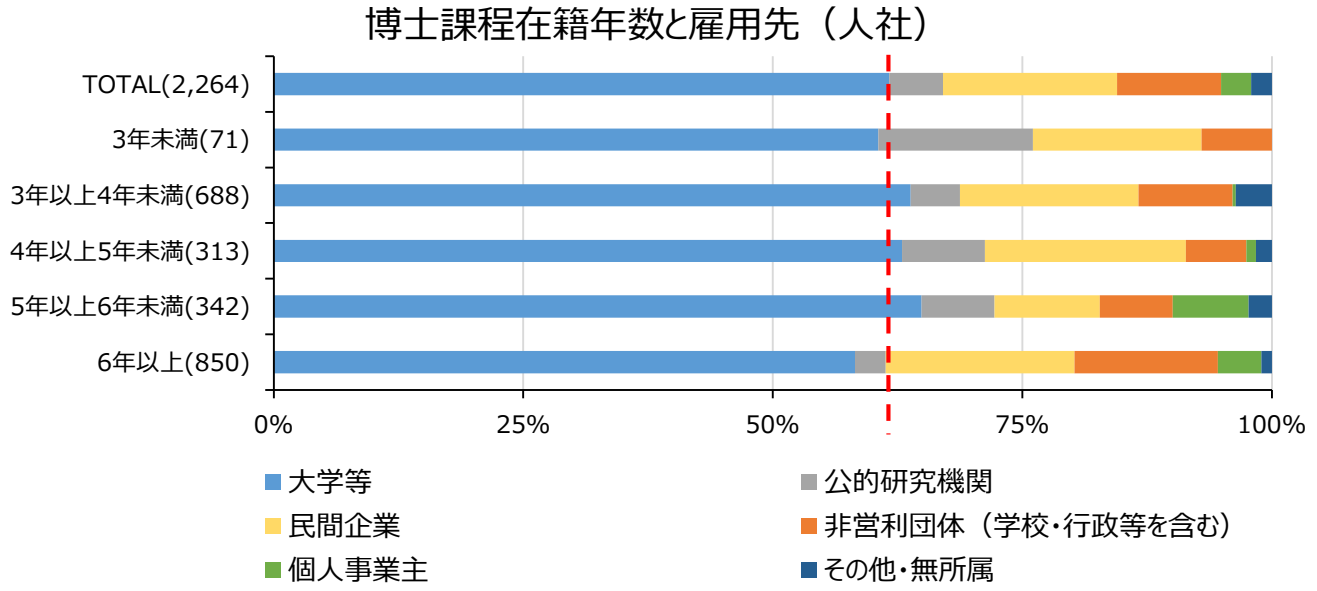


- 欧州諸国における博士課程修了に要する年数は3.5～4.5年が標準的となっている（全分野）
- また、10年前と比較して博士課程修了に要する年数は「減った」とする機関が43%存在しており、「増えた」とする回答は15%となっている

【出典】Hasgall et al.「SURVEY Doctoral education in Europe today: approaches and institutional structures」（2019, European University Association）

博士後期課程の在籍年数と就職先（課程修了1.5年後）の関係性



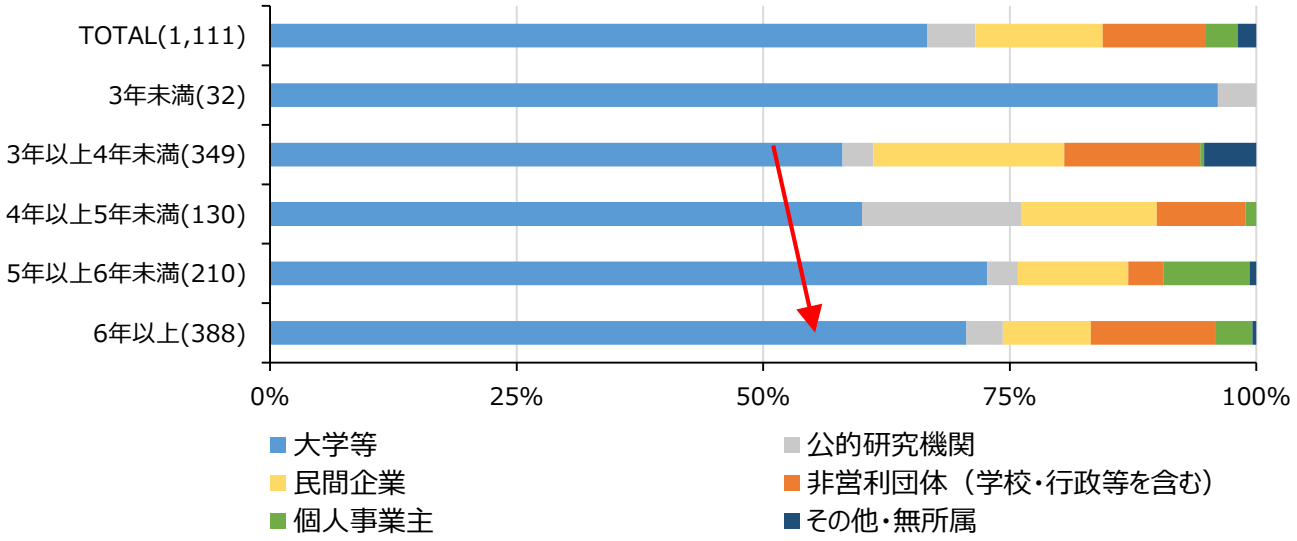


- 博士課程在籍年数と修了1.5年後の雇用先の関係をグラフ化
- 全分野で見ると、博士課程在籍年数と雇用先との関係性に明確な傾向は見られない
- 人文科学・社会科学系では、博士課程在籍年数によらず大学等に雇用されている割合が全分野平均と比較して10ポイント程度高い

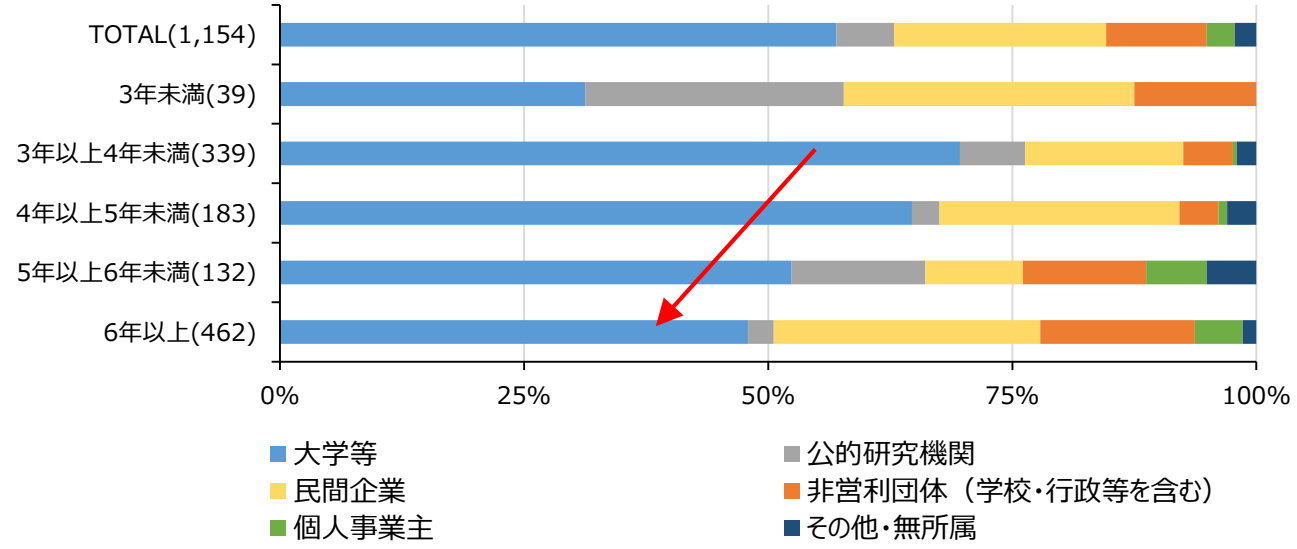
【出典】科学技術・学術政策研究所「博士人材追跡調査」より、2018年博士課程修了者の1.5年後の状況についてグラフ化
（※回答者数は数字は重みづけされた値）

博士後期課程の在籍年数と就職先（課程修了1.5年後）の関係性

博士課程在籍年数と雇用先（人文科学）



博士課程在籍年数と雇用先（社会科学）

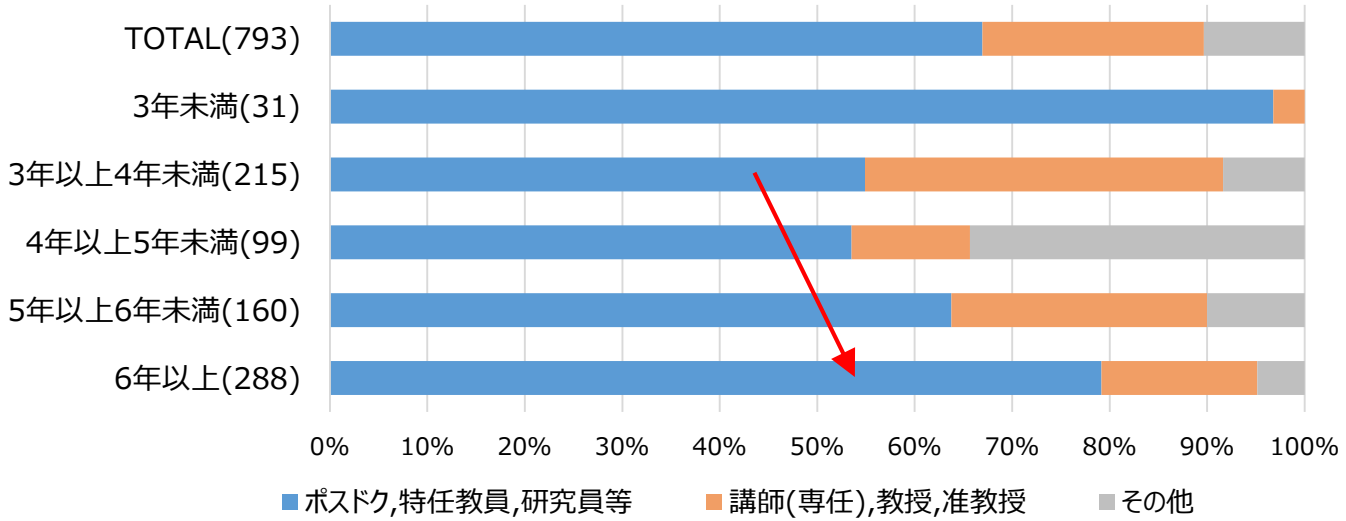


- 人文科学系では、標準修業年限を超過するほど大学等で雇用されている割合がやや高い傾向
- 社会科学系では、標準修業年限を超過するほど大学以外で雇用されている割合が高い傾向
- 在籍年数3年未満（早期卒業者等）においては、人文科学系では大学等で、社会科系では大学以外で雇用されている割合が高い

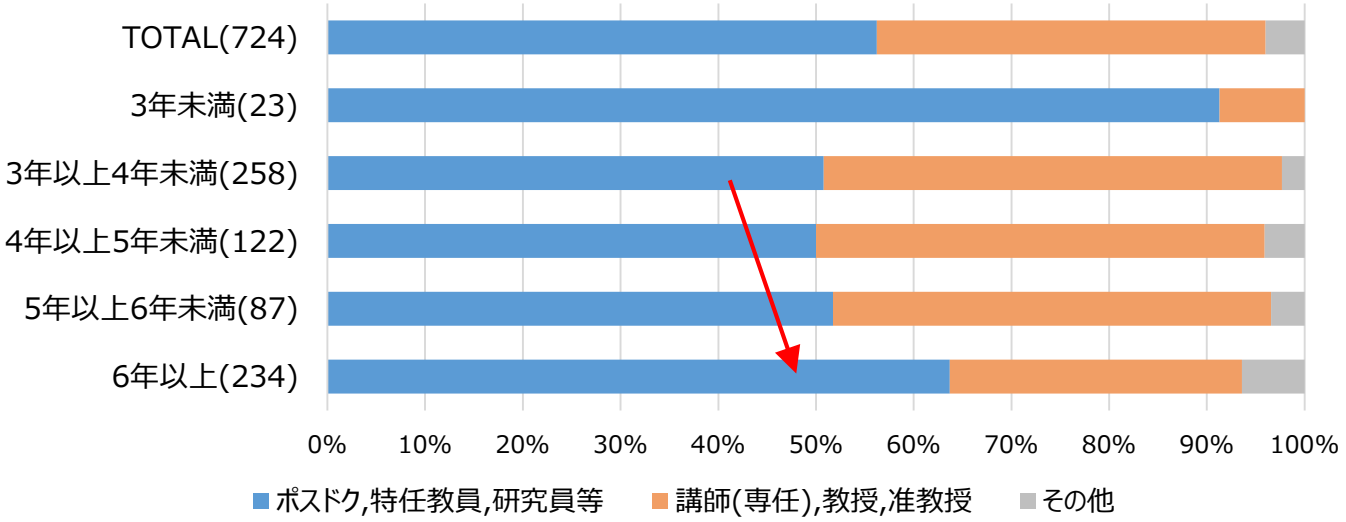
【出典】科学技術・学術政策研究所「博士人材追跡調査」より、2018年博士課程修了者の1.5年後の状況についてグラフ化
（※回答者数は数字は重みづけされた値）

博士後期課程の在籍年数と就職先（課程修了1.5年後）の関係性

博士課程在籍年数と大学等での雇用形態（人文科学）



博士課程在籍年数と大学等での雇用形態（社会科学）



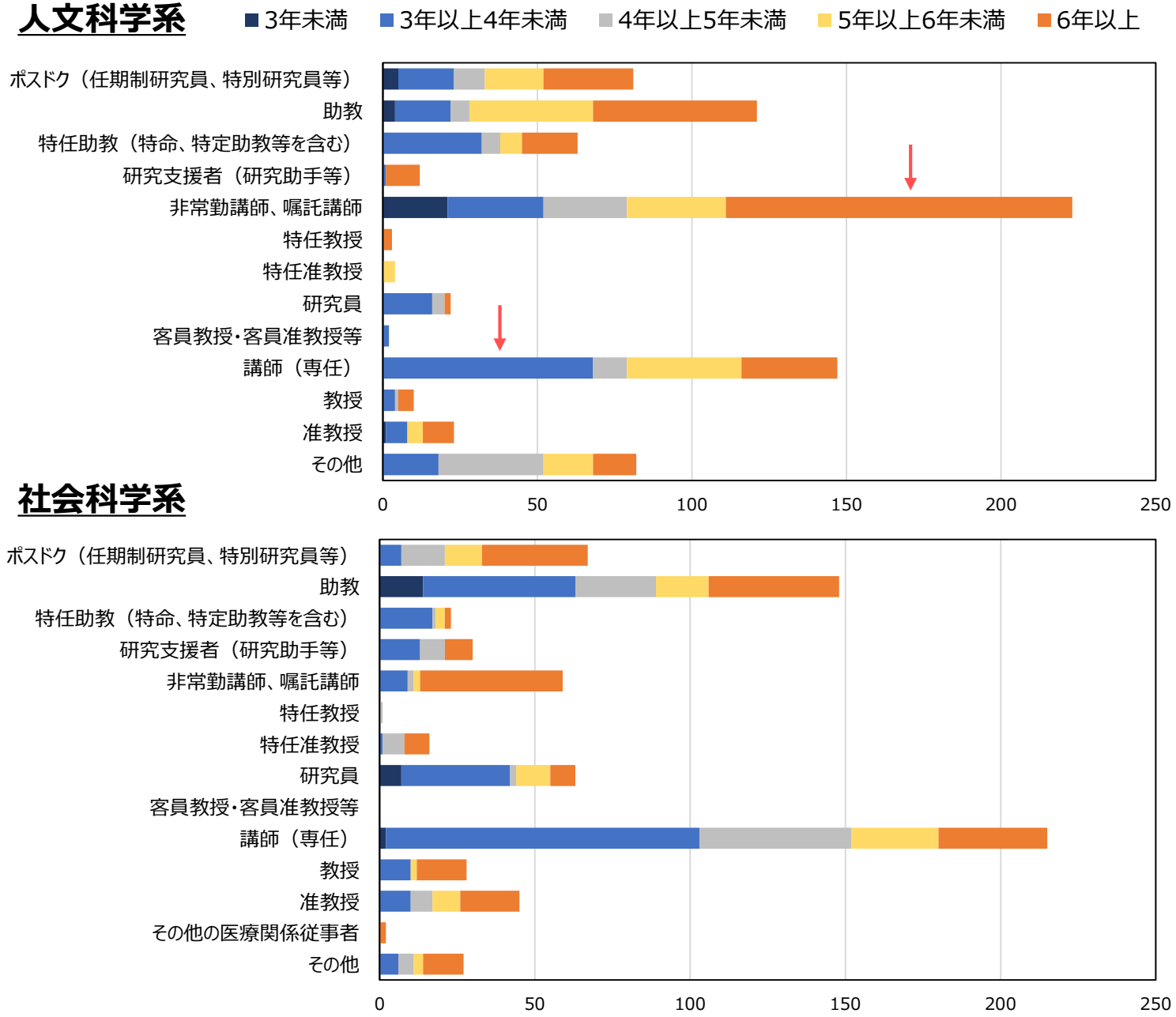
- 博士課程在籍年数ごとに修了者の大学等における雇用の内訳（正規・非正規）を分析
- 人文科学系と社会科学系では、ともに標準修業年限を超過するにつれて、ポスドク、研究員等としての雇用（≒非正規雇用）割合が高まる傾向
- 在籍年数3年未満（早期卒業者等）においては、ポスドク、研究員等が多い

■：ポスドク，助教，特任助教，研究支援者，非常勤・委託講師，特任教授，特任准教授，研究員，客員教授，客員准教授

■：講師（専任），教授，准教授

【出典】科学技術・学術政策研究所「博士人材追跡調査」より、2018年博士課程修了者の1.5年後の状況についてグラフ化（※回答者数は数字は重みづけされた値）

博士後期課程の在籍年数と就職先（課程修了1.5年後）の関係性



- 大学等での職位ごとに、雇用されている博士課程修了者の博士課程在籍年数の内訳を分析
- 人文科学系では非常勤講師・委託講師として雇用されている者が多く、その約半数が博士課程に6年以上在籍した者
- 人文科学系の講師（専任）については、その約半数が博士課程に3年以上4年未満在籍した者
- 社会科学系では講師（専任）として雇用されている者が多く、その約半数が博士課程に3年以上4年未満在籍した者

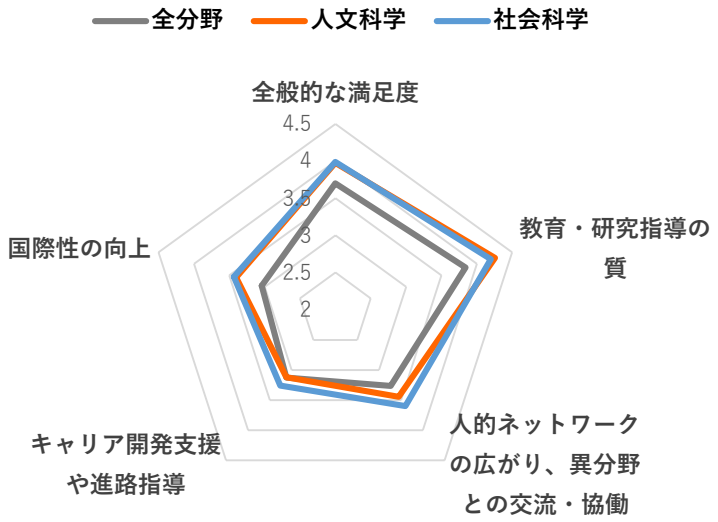
【出典】科学技術・学術政策研究所「博士人材追跡調査」より、2018年博士課程修了者の1.5年後の状況についてグラフ化（※回答者数は数字は重みづけされた値）

４．大学院教育・研究

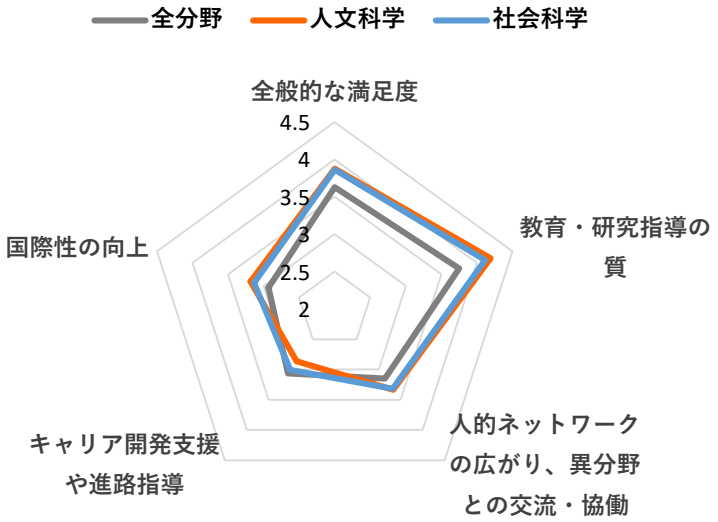
修士課程の満足度

- 人文科学・社会科学系における修士課程在籍中の経験に対する満足度は、「キャリア開発支援」及び社会人学生からの「人的ネットワーク」を除き、他の分野に比して高い傾向にある

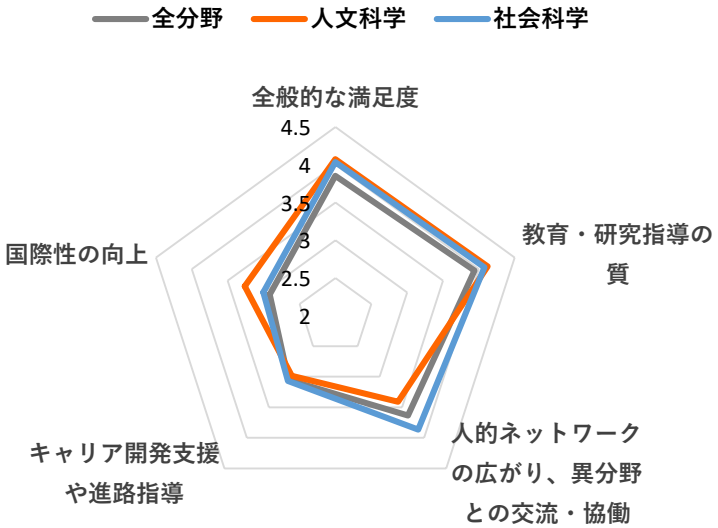
修了者全体



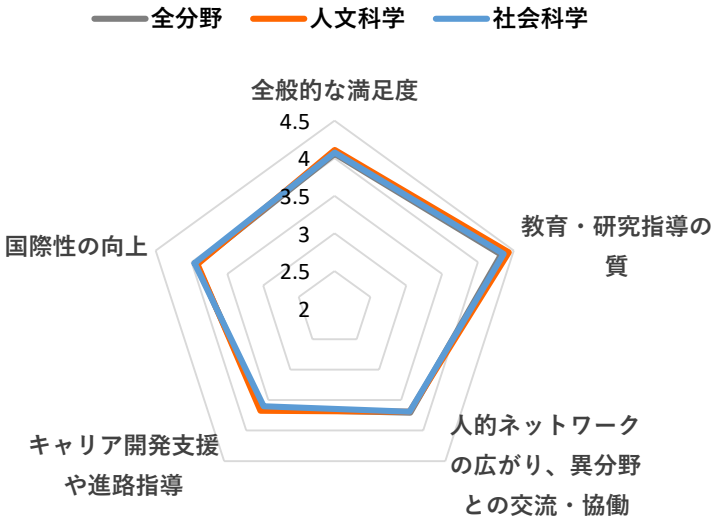
ストレート



社会人



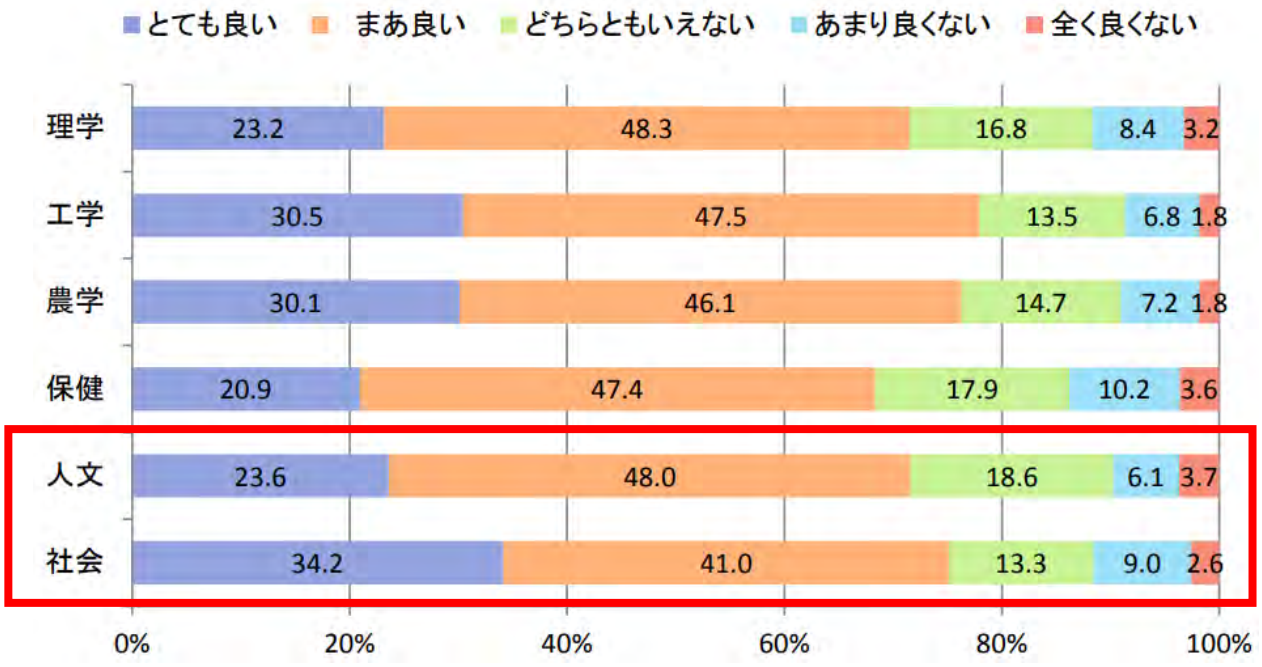
留学生

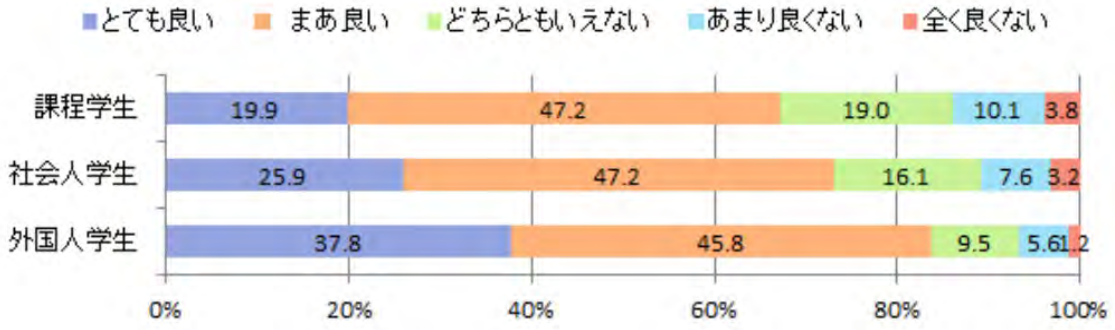


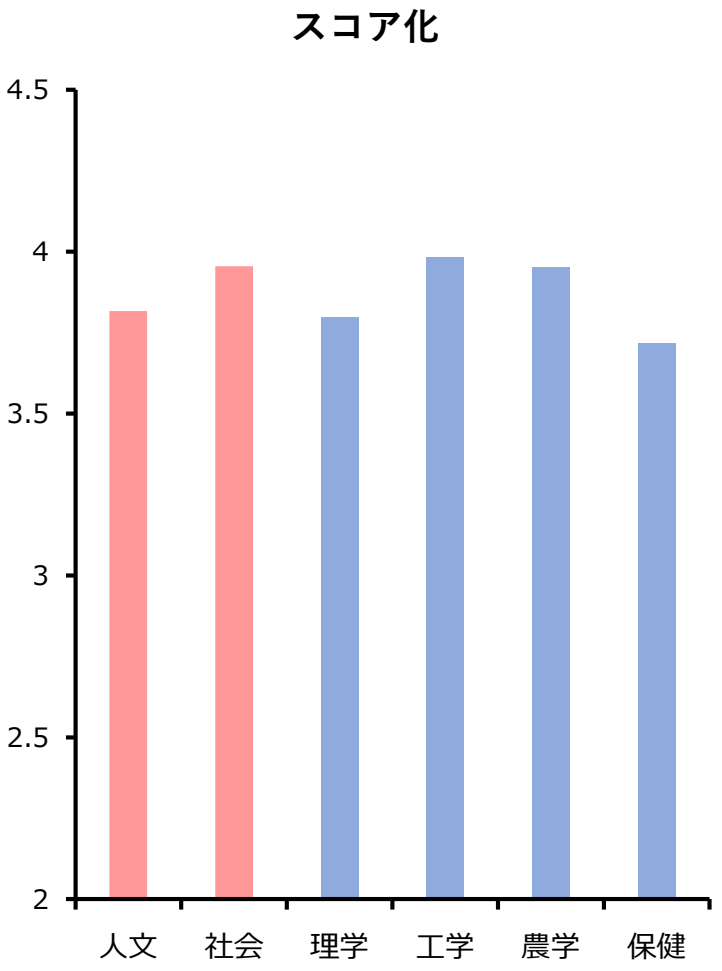
【出典】「修士課程（6 年制学科を含む）在籍者を起点とした追跡調査(2020年度修了（卒業）者及び修了(卒業)予定者に関する報告)」（文部科学省 科学技術・学術政策研究所）を基に作成

博士課程の満足度

- 博士課程プログラム対する満足度は、人文科学・社会科学系と他の分野とで大きな差はない
- なお博士課程プログラムへの満足度は、全分野平均において課程学生（ストレート）が最も低く、社会人学生、外国人学生の順に高くなる傾向



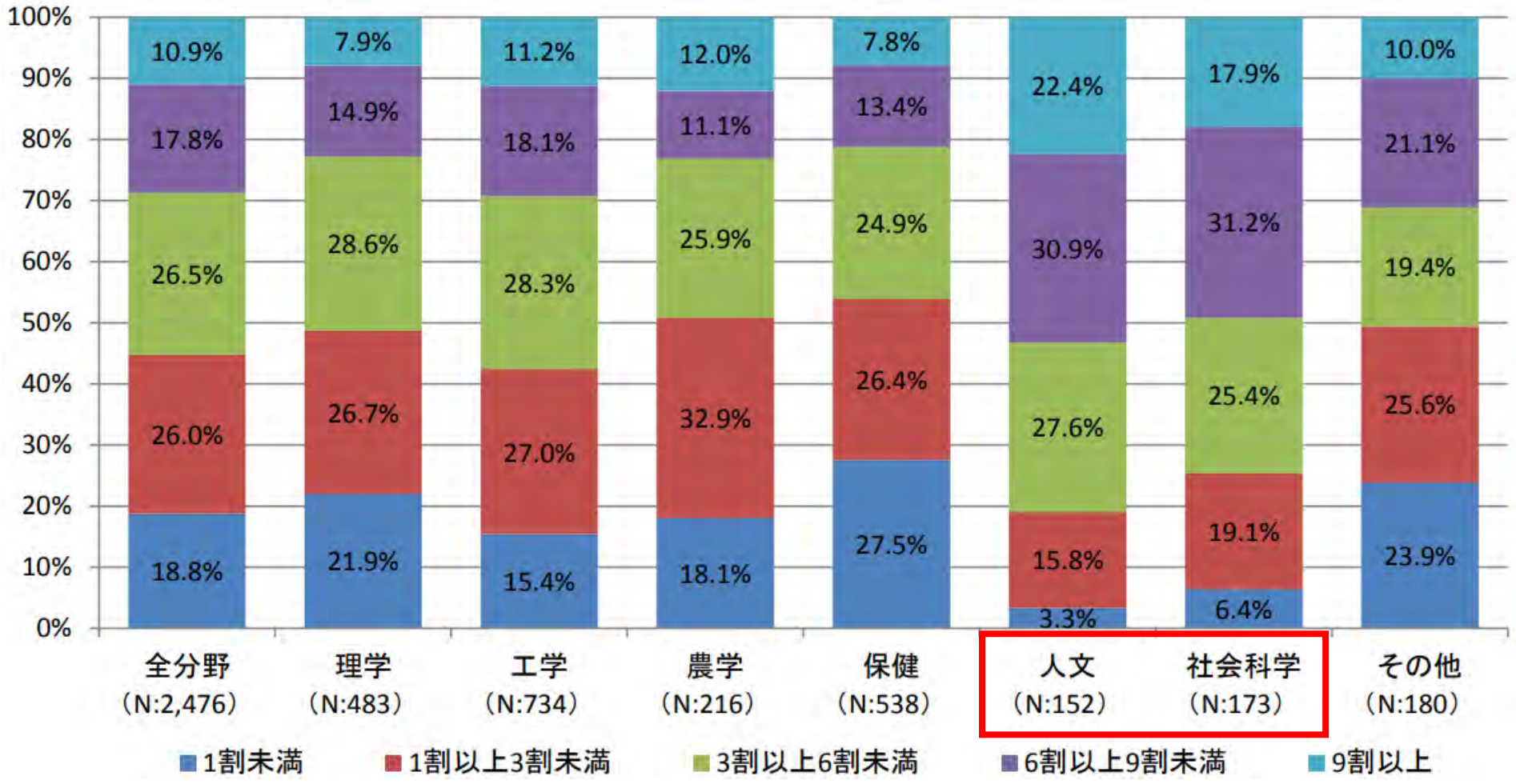




【出典】「博士人材追跡調査」第2次報告書（文部科学省 科学技術・学術政策研究所,2018年）を基に作成

大学院で履修した授業のうち履修して良かったと思う授業の割合

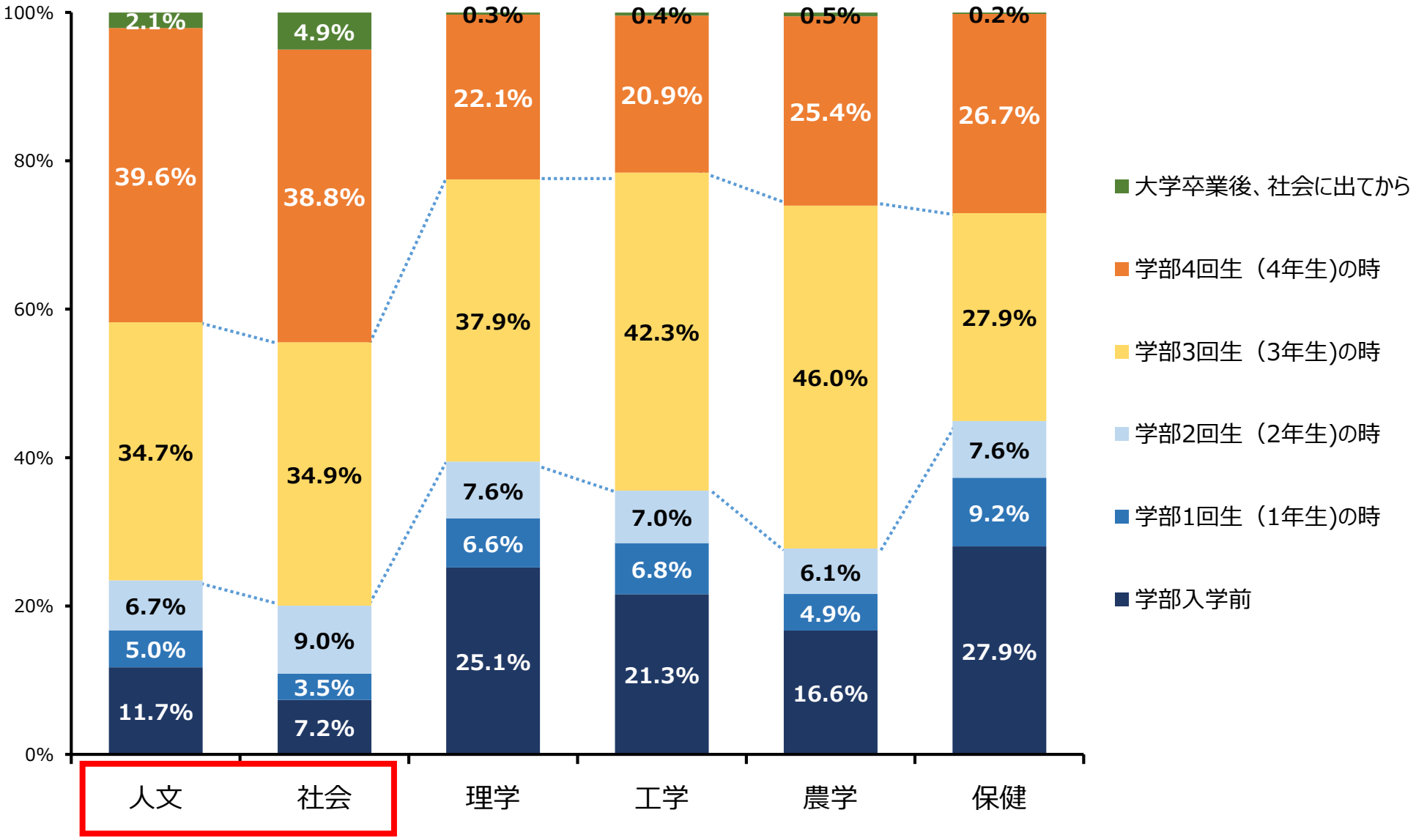
- 大学院（修士・博士）の授業のうち履修して良かったと思う授業が6割以上を占めると回答した学生は3割以下に留まる
- 人文・社会科学系では他の分野と比べて履修して良かったと思う授業の割合が高い



【出典】「博士課程修了者調査2011：我が国の博士課程における研究指導・教育に関する調査研究」（科学技術政策研究所, 2012年12月）

修士課程進学を決めた時期（社会人経験なしの学生）

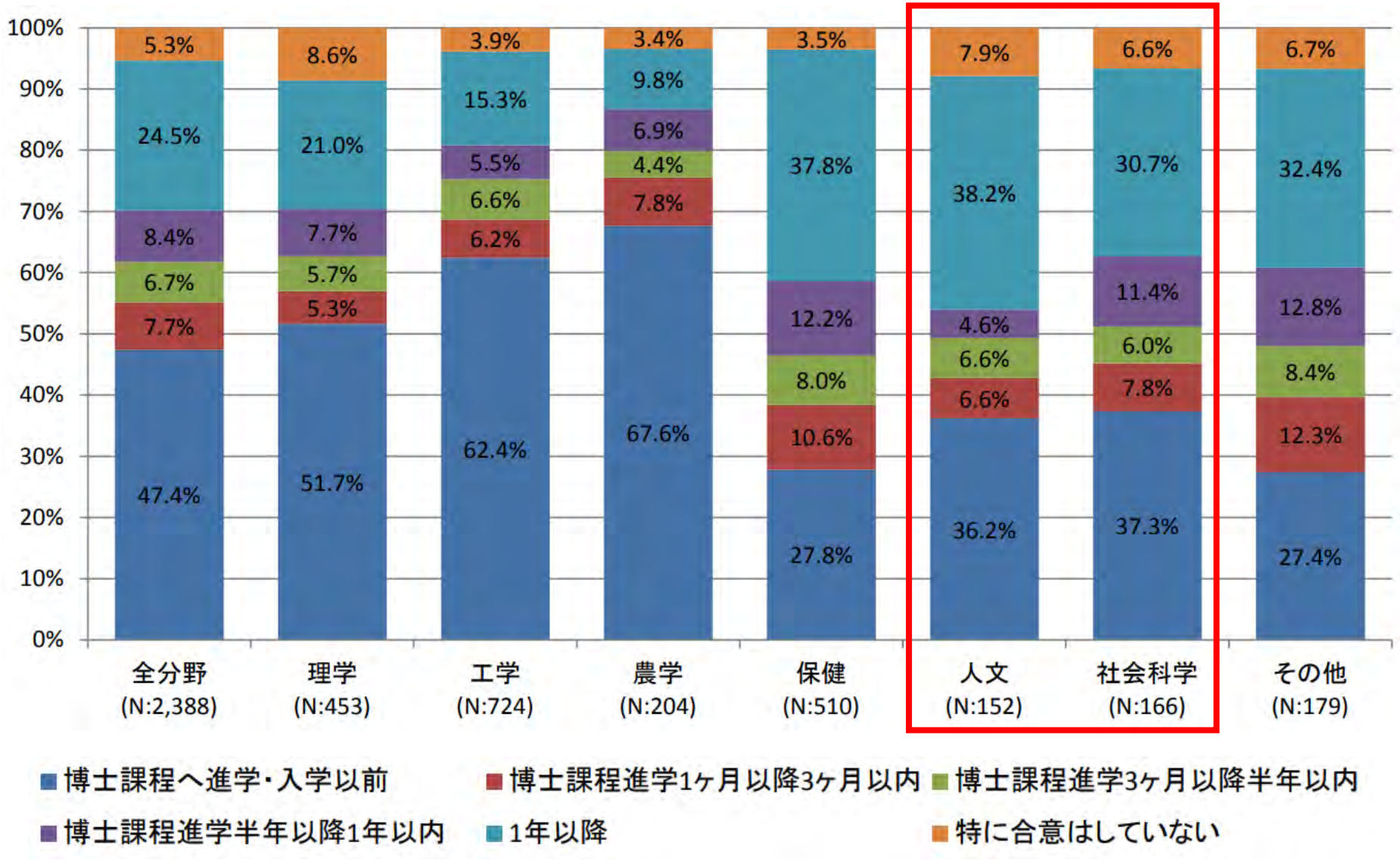
● 人文科学・社会科学系では、他の分野と比較して修士課程への進学を決める時期が遅い。



【出典】修士課程（6 年制学科を含む）在籍者を起点とした追跡調査(2020 年度修了（卒業）者及び修了(卒業)予定者に関する報告) NISTEP RESEARCH MATERIAL, No.310, 文部科学省 科学技術・学術政策研究所.

博士論文のテーマについて指導教員と合意した時期

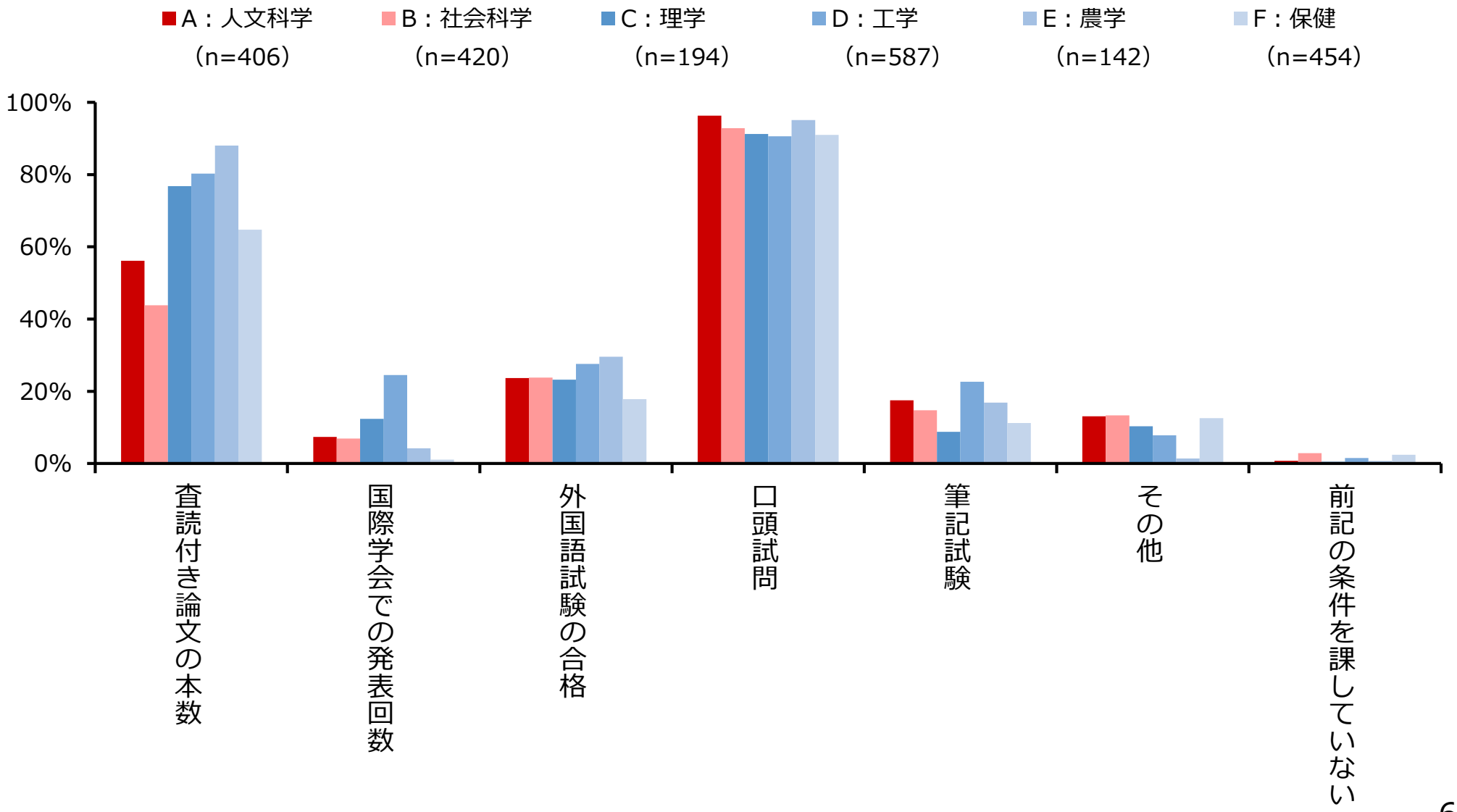
- 人文・社会科学系では博士論文のテーマが決定する時期が他の分野に比較して遅く、人文系では約4割が進学後1年以降となっている



【出典】「博士課程修了者調査2011:我が国の博士課程における研究指導・教育に関する調査研究」（科学技術政策研究所, 2012年12月）

課程博士授与にあたっての条件

● 人文科学・社会科学系では査読付き論文の本数について、課程博士の授与条件としている割合が少ない

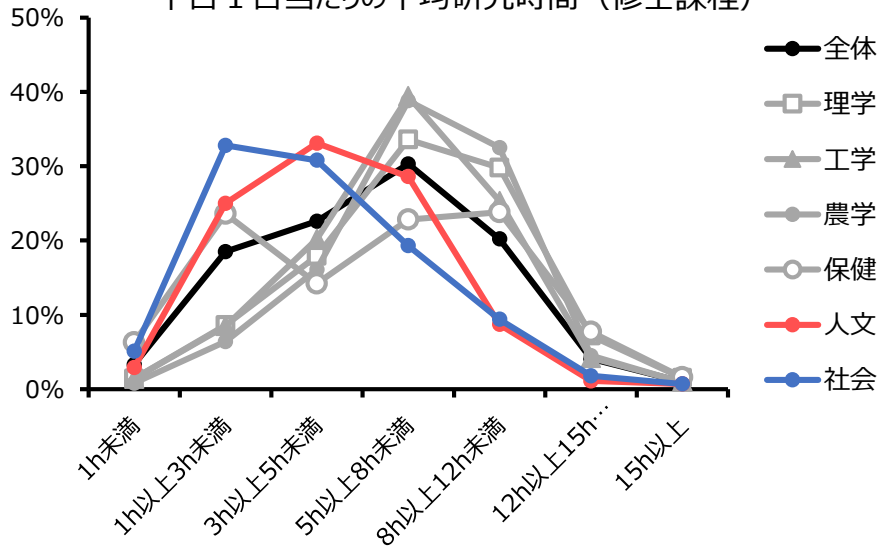


【出典】令和３年度文部科学省委託調査「大学院における教育改革の実態把握・分析等に関する調査研究」（リベルタス・コンサルティング，令和４年）

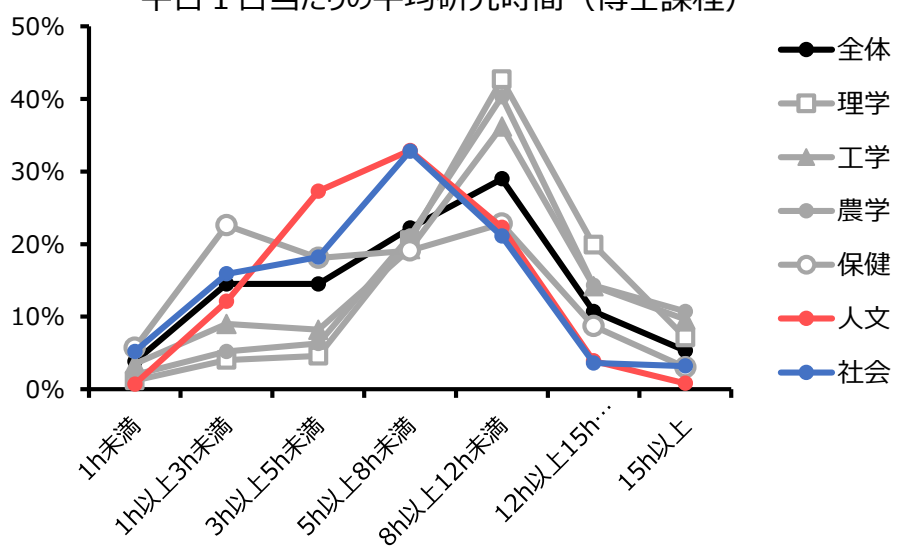
人文科学・社会科学系の研究教育特性

● 数字だけで見ると、人文科学・社会科学系の大学院生の研究時間は自然科学系よりも短い

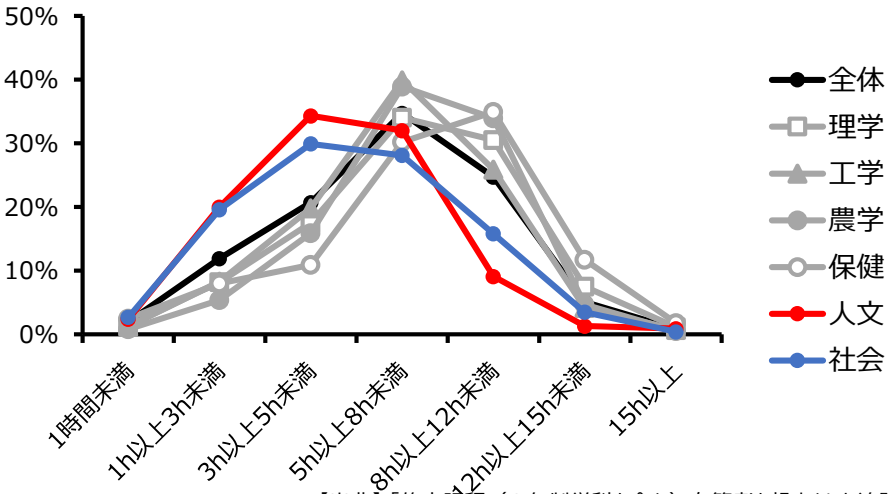
平日１日当たりの平均研究時間（修士課程）



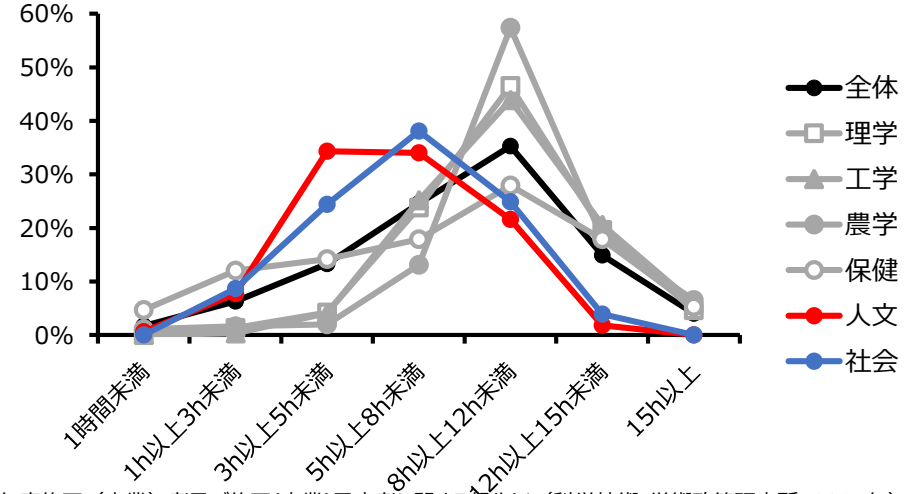
平日１日当たりの平均研究時間（博士課程）



平日１日当たりの平均研究時間
（修士課程・社会人学生及び留学生を除く）



平日１日当たりの平均研究時間
（博士課程・社会人学生及び留学生を除く）

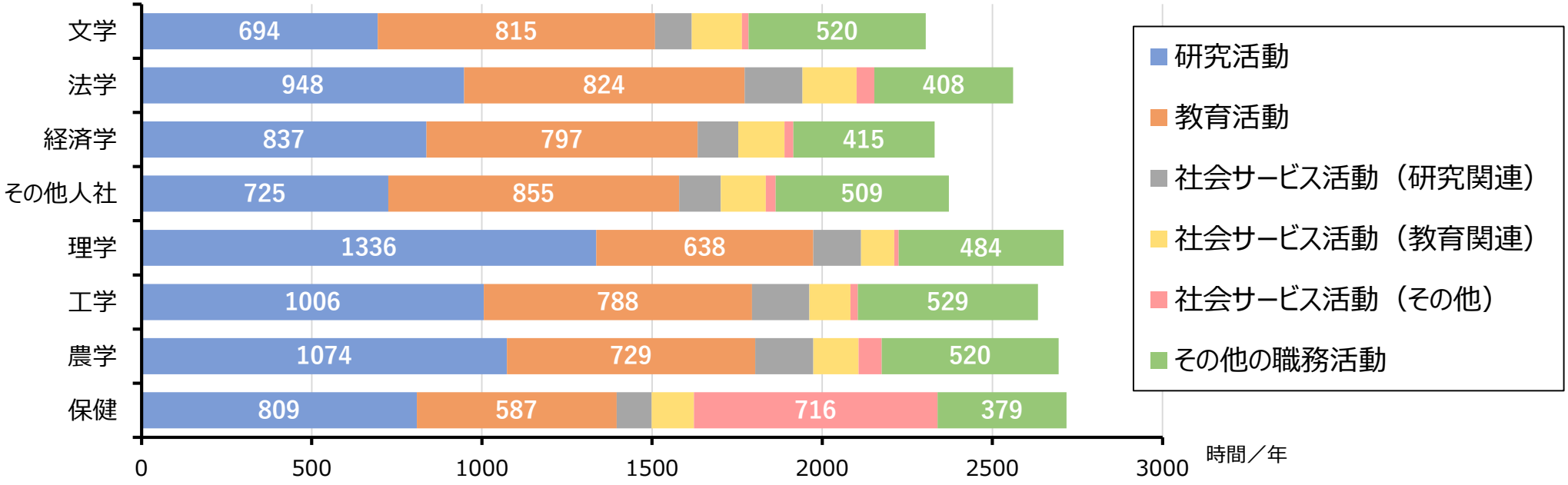


【出典】「修士課程（6 年制学科を含む）在籍者を起点とした追跡調査(2020年度修了（卒業）者及び修了(卒業)予定者に関する報告)」（科学技術・学術政策研究所, 2021年）
「博士人材追跡調査－第４次報告書－」（科学技術・学術政策研究所, 2022年）

人文科学・社会科学系の研究教育特性

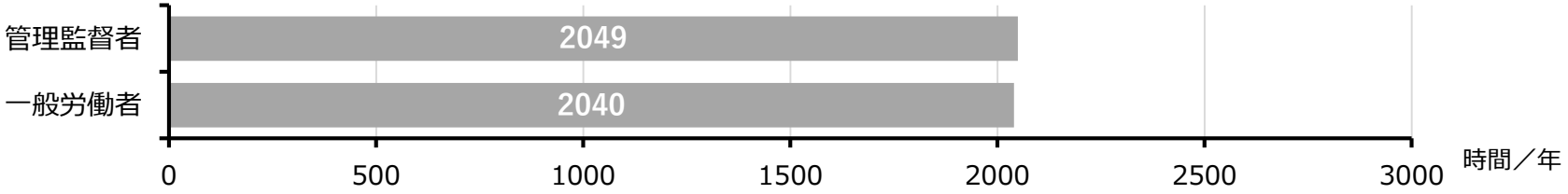
- 数字だけで見ると、人文科学・社会科学系の教員の総活動時間は自然科学系よりも短い（ただし、一般の民間企業よりも長い）

教員の総職務時間の活動時間の組織の学問分野別内訳（平成29年度）



※１年間における活動パターン別の日数と活動パターン別の標準的な１日における職務時間を乗じることで、年間の職務従事時間を集計
【出典】文部科学省「大学等におけるフルタイム換算データに関する調査報告書」（平成31年3月，株式会社日経リサーチ）

（参考）民間企業の年間労働時間平均（2017年）



【出典】「2020年 労働時間等実態調査」（2020年9月,一般社団法人日本経済団体連合会）

課程博士取得に必要な年数の認識

※国公私の大学院生2,656名の回答
大学のタイプは研究機能と大学院教育の強さによる分類（出典参照）

表 1－5　課程博士の取得可能性：大学院生

専門分野	タイプ	博士後期に入学後何年必要だと思うか				博士後期在学中に課程博士を取得する見込み			
		3 年	4－5 年	6 年以上	差	十分可能	努力すれば可能	難しい	差
文系	Ⅰ	22.7%	60.4%	16.9%	*	12.6%	59.5%	27.8%	
	Ⅱ	22.1%	56.6%	21.3%		8.8%	61.0%	30.1%	
	Ⅲ	22.6%	49.1%	28.3%		7.8%	59.1%	33.1%	
理系	Ⅰ	66.3%	31.9%	1.7%		31.7%	59.7%	8.7%	
	Ⅱ	63.1%	34.4%	2.5%		26.9%	64.7%	8.3%	
	Ⅲ	58.2%	40.4%	1.5%		26.8%	62.7%	10.5%	
医療系	Ⅰ	48.6%	50.3%	1.1%	**	38.7%	56.4%	5.0%	
	Ⅱ	32.1%	64.7%	3.2%		34.0%	58.5%	7.5%	
	Ⅲ	42.2%	57.4%	0.4%		39.6%	58.4%	2.0%	
文系	国	25.1%	60.8%	14.2%	***	12.4%	62.4%	25.3%	*
	公	28.3%	41.7%	30.0%		5.0%	60.0%	35.0%	
	私	19.1%	52.2%	28.8%		8.3%	57.4%	34.3%	
理系	国	66.3%	31.9%	1.8%	**	29.9%	61.4%	8.7%	
	公	71.6%	28.4%	0.0%		28.4%	65.4%	6.2%	
	私	53.1%	44.1%	2.8%		27.1%	62.5%	10.4%	
医療系	国	41.0%	56.9%	2.0%	**	34.8%	59.8%	5.4%	
	公	56.5%	39.1%	4.3%		47.8%	47.8%	4.3%	
	私	39.9%	60.1%	0.0%		41.6%	55.6%	2.8%	

- 課程博士の取得に係る大学院生の認識は、文系（人文科学、社会科学系、教育、芸術等を含む）において他の分野よりも長い期間を選択する者が多く、文系の３割が在学中に課程博士を取得することが困難との認識。
- 文系においては、課程博士取得までに「６年以上」必要と考えている、また、在学中に課程博士を取得することが困難と考えている大学院生は公立と私立に多い。

【出典】山崎博敏「大学院教育と学位授与に関する研究Ⅱ 第１章 大学院教育と学位授与：大学類型間比較」（2007年，広島大学高等教育研究開発センター）

研究指導の頻度と満足度

表 5－1　指導教員の研究指導の密接度

	十分である	少な目だが十分である	十分ではない	合計
文系	38.6%	45.0%	16.4%	100.0%
理系	48.5%	38.6%	12.9%	100.0%
医療系	37.4%	43.6%	19.0%	100.0%
全体	**44.8%**	**40.4%**	**14.8%**	**100.0%**

表 5－2　指導教員の研究指導の頻度

	週 1 回以上	週 1 回程度	月に 1，2 回程度	年に数回程度	ほとんどない	合計
文系	10.2%	19.3%	37.0%	25.0%	8.6%	100.0%
理系	24.5%	26.5%	35.1%	9.6%	4.2%	100.0%
医療系	29.2%	27.7%	28.2%	9.3%	5.7%	100.0%
全体	**21.1%**	**24.4%**	**34.1%**	**14.6%**	**5.8%**	**100.0%**

表 5－3　研究指導の密接度と指導の頻度の関係

		週 1 回以上	週 1 回程度	月に 1，2 回程度	年に数回程度	ほとんどない	差
文系	十分である	83.8%	64.3%	37.6%	13.6%	1.6%	***
	少なめだが十分	13.5%	32.9%	53.0%	60.5%	31.1%	
	十分ではない	2.7%	2.9%	9.4%	26.0%	67.2%	
理系	十分である	84.8%	53.1%	34.4%	12.5%	6.3%	***
	少なめだが十分	13.4%	40.3%	53.3%	49.1%	29.2%	
	十分ではない	1.8%	6.6%	12.3%	38.4%	64.6%	
医療系	十分である	72.9%	55.0%	30.5%	13.2%	15.2%	***
	少なめだが十分	25.3%	37.5%	48.8%	52.8%	18.2%	
	十分ではない	1.8%	7.5%	20.7%	34.0%	66.7%	
全体	十分である	81.0%	55.9%	34.3%	12.4%	6.0%	***
	少なめだが十分	17.0%	38.0%	52.7%	55.8%	26.0%	
	十分ではない	2.0%	6.1%	12.9%	31.8%	68.0%	

注：***は 0.1%，**は 1%，*は 5%水準で有意であることを示す。表中の比率は列方向の%。

- 指導教員の研究指導の密接度に対する大学院生の満足度は、文系と他の分野において大きく変わらない。
- 一方、実際の研究指導の頻度は、文系では他の分野よりも少ない。

【出典】福留東土「大学院教育と学位授与に関する研究 Ⅱ 第 5 章 大学院生の研究活動と研究指導」（2007年，広島大学高等教育研究開発センター）

学生の研究テーマと教員の得意とする研究領域①

表 5−4　大学院生の研究テーマと指導教員の研究との関係

	指導教員を中心とする共同研究の一部	指導教員が得意とする研究領域の一部	指導教員が得意とする研究領域とは異なったテーマ	合計
文系	6.2%	57.3%	36.4%	100.0%
理系	31.9%	54.1%	14.0%	100.0%
医療系	23.6%	51.6%	24.8%	100.0%
全体	**24.8%**	**54.0%**	**21.2%**	**100.0%**

表 5−5　研究指導の密接度と学生の研究テーマの関係

		指導教員を中心とする共同研究の一部	指導教員が得意とする研究領域の一部	指導教員が得意とする研究領域とは異なったテーマ	差
文系	十分である	68.9%	43.9%	24.6%	***
	少な目だが十分	17.8%	43.4%	52.3%	
	十分ではない	13.3%	12.7%	23.1%	
理系	十分である	61.1%	47.8%	22.2%	***
	少な目だが十分	32.1%	40.1%	47.5%	
	十分ではない	6.8%	12.1%	30.2%	
医療系	十分である	54.3%	50.0%	24.4%	***
	少な目だが十分	38.1%	36.1%	38.4%	
	十分ではない	7.6%	13.9%	37.2%	
全体	十分である	59.0%	46.4%	23.8%	***
	少な目だが十分	32.8%	40.6%	48.6%	
	十分ではない	8.2%	13.0%	27.6%	

注：***は 0.1%，**は 1%，*は 5%水準で有意であることを示す。表中の比率は列方向の%。

- 文系において大学院生の研究テーマが指導教員の得意分野と重なる割合は極めて低く、別の領域となっている割合が高い。
- 大学院生の研究テーマが教員の得意分野から遠ざかるほど、研究指導の密接度に対する満足度は下がる。

【出典】福留東土「大学院教育と学位授与に関する研究Ⅱ 第５章 大学院生の研究活動と研究指導」（2007年, 広島大学高等教育研究開発センター）

学生の研究テーマと教員の得意とする研究領域②

表 5－6　「研究テーマの性格」と「学位取得に必要と考える年数」との関係

		共同研究の一部	教員が得意とする研究領域の一部	教員が得意とする研究領域とは異なったテーマ	差
文系	3 年	37.8%	24.1%	17.7%	**
	4－5 年	55.6%	55.6%	54.6%	
	6 年以上	6.7%	20.2%	27.7%	
理系	3 年	66.2%	63.1%	58.4%	
	4－5 年	32.4%	35.2%	37.9%	
	6 年以上	1.4%	1.8%	3.7%	
医療系	3 年	44.4%	40.5%	39.8%	
	4－5 年	54.5%	57.8%	60.2%	
	6 年以上	1.0%	1.7%	0.0%	
全体	3 年	57.2%	45.8%	34.5%	***
	4－5 年	41.0%	46.9%	50.7%	
	6 年以上	1.8%	7.3%	14.7%	

注：***は 0.1%，**は 1%，*は 5%水準で有意であることを示す。表中の比率は列方向の%。

表 5－7　「研究テーマの性格」と「課程博士取得見込み」との関係

		共同研究の一部	教員が得意とする研究領域の一部	教員が得意とする研究領域とは異なったテーマ	差
文系	十分可能	28.9%	8.7%	8.8%	***
	努力すれば可能	44.4%	63.7%	56.9%	
	難しい	26.7%	27.6%	34.4%	
理系	十分可能	29.5%	29.6%	26.1%	*
	努力すれば可能	62.9%	62.5%	58.4%	
	難しい	7.6%	8.0%	15.5%	
医療系	十分可能	40.5%	35.8%	38.8%	
	努力すれば可能	55.0%	59.1%	58.8%	
	難しい	4.5%	5.1%	2.4%	
全体	十分可能	32.1%	23.9%	19.5%	***
	努力すれば可能	59.8%	62.5%	57.9%	
	難しい	8.1%	13.6%	22.6%	

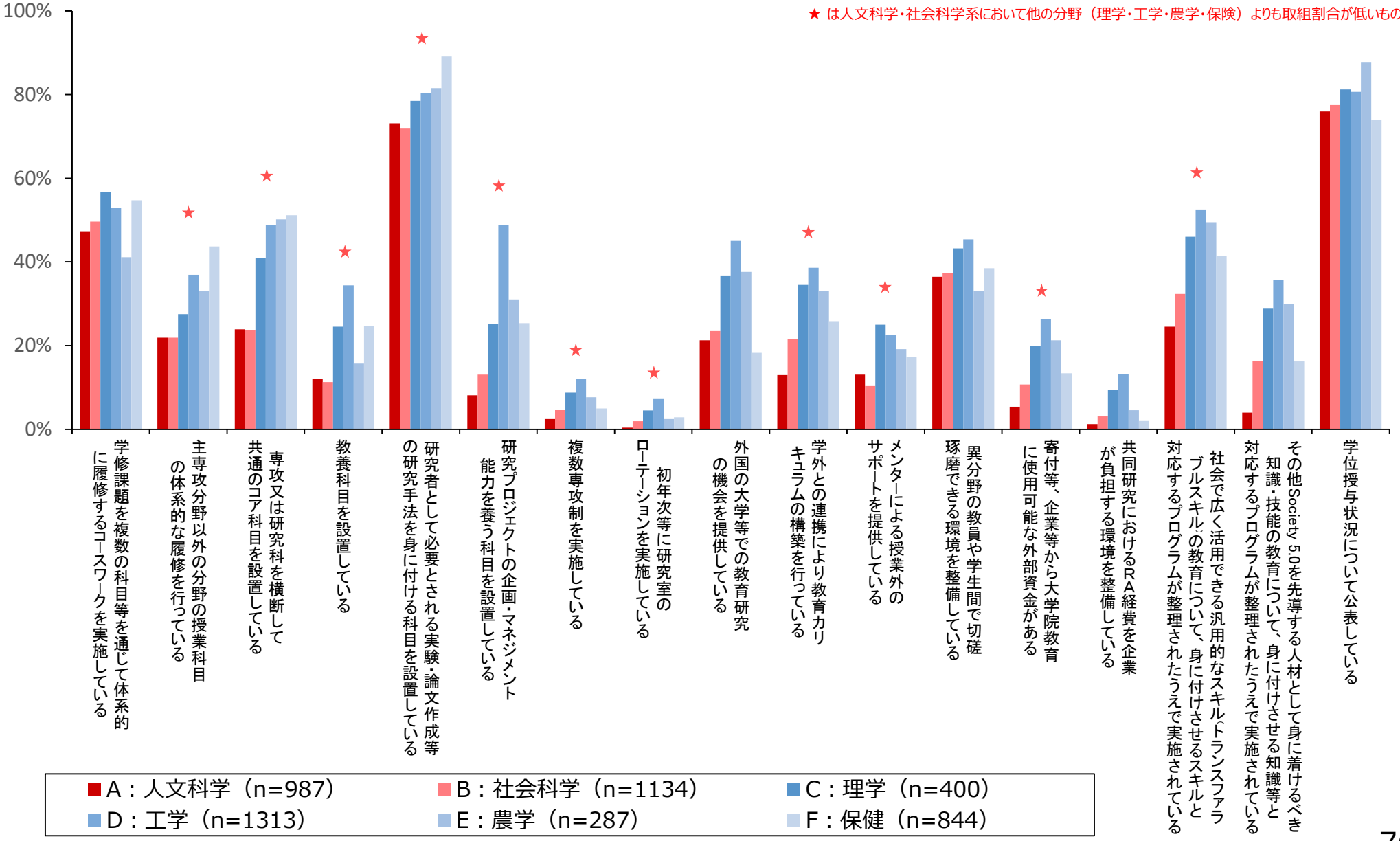
- 大学院生の研究テーマが教員の得意分野から遠ざかるほど、想定される学位取得に必要な年数は伸びる。
- 大学院生の研究テーマが教員の得意分野から遠ざかるほど、在学中の課程博士の取得見込みも下がる。

【出典】福留東土「大学院教育と学位授与に関する研究Ⅱ 第５章 大学院生の研究活動と研究指導」（2007年, 広島大学高等教育研究開発センター）

５．組織的な取組

大学院教育改革状況（体系的な大学院教育）

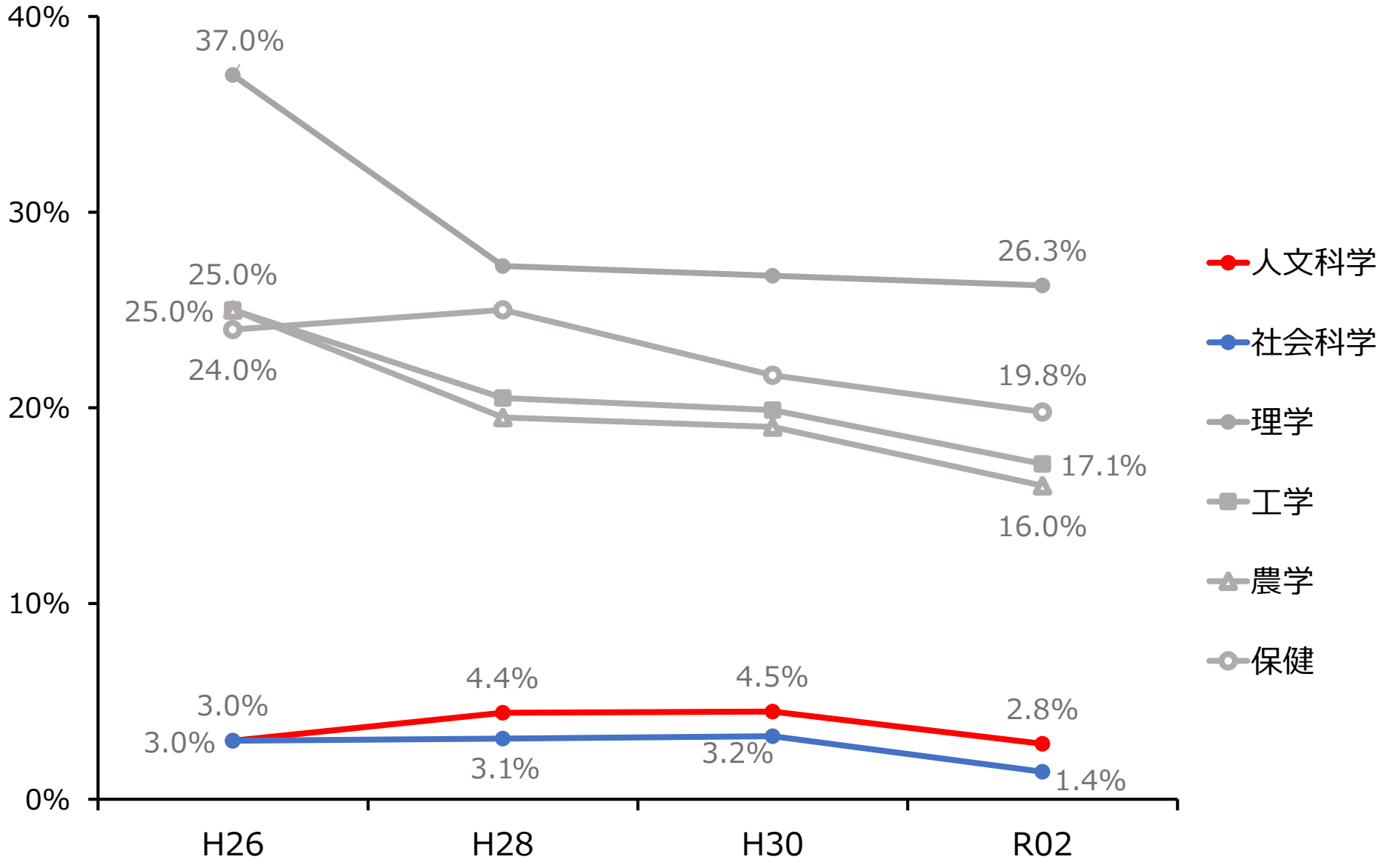
● 答申等で示されてきた大学院教育の改革方針について、人文科学・社会科学系では全般的に取組が進んでいない



【出典】令和３年度文部科学省委託調査「大学院における教育改革の実態把握・分析等に関する調査研究」（リベルタス・コンサルティング，令和４年）

大学院教育改革状況（研究指導委託の実施状況）

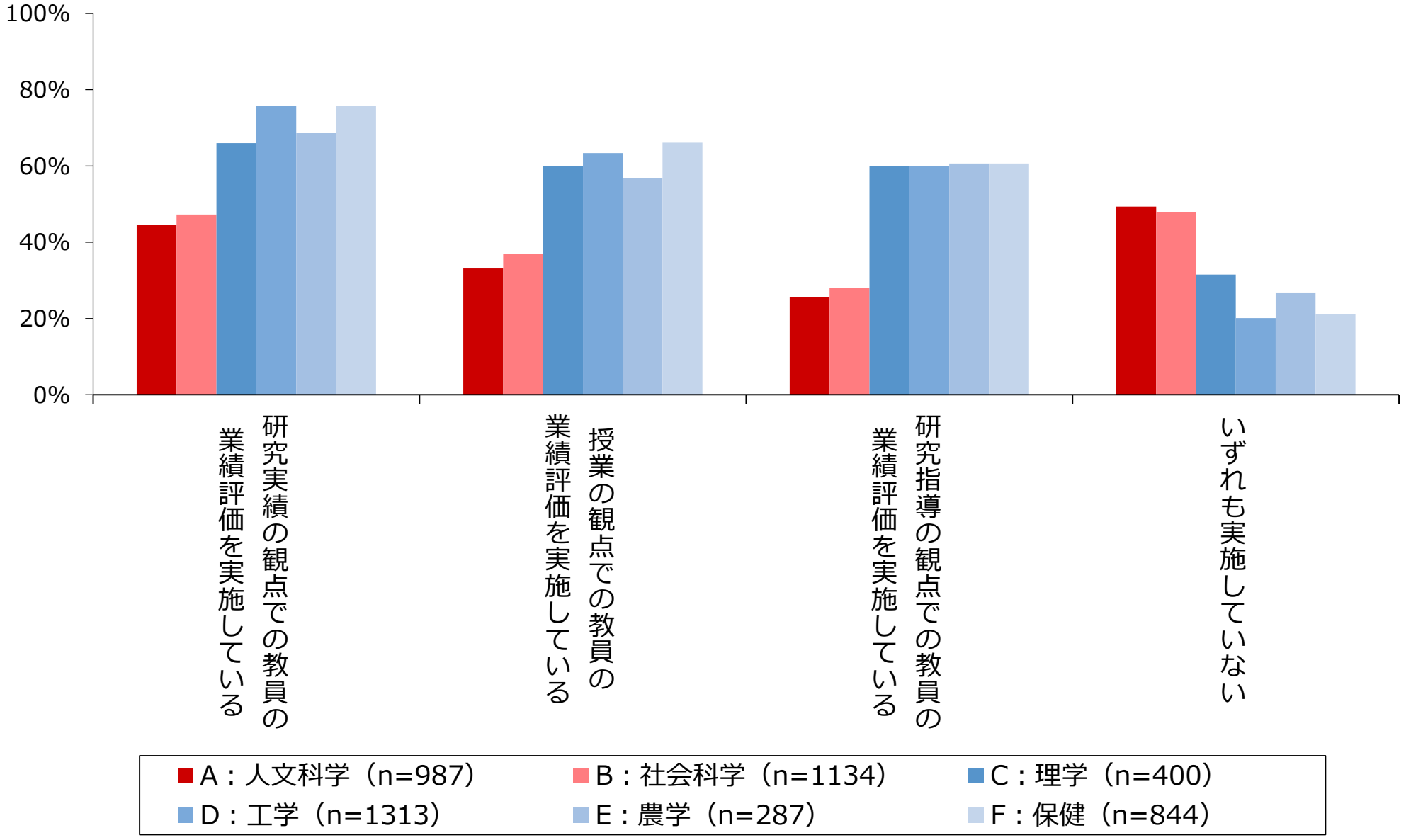
● 人文科学・社会科学系では研究指導委託の実施割合が極めて少ない



【出典】令和３年度文部科学省委託調査「大学院における教育改革の実態把握・分析等に関する調査研究」（リベルタス・コンサルティング，令和４年）

大学院教育改革状況（教員の業績評価）

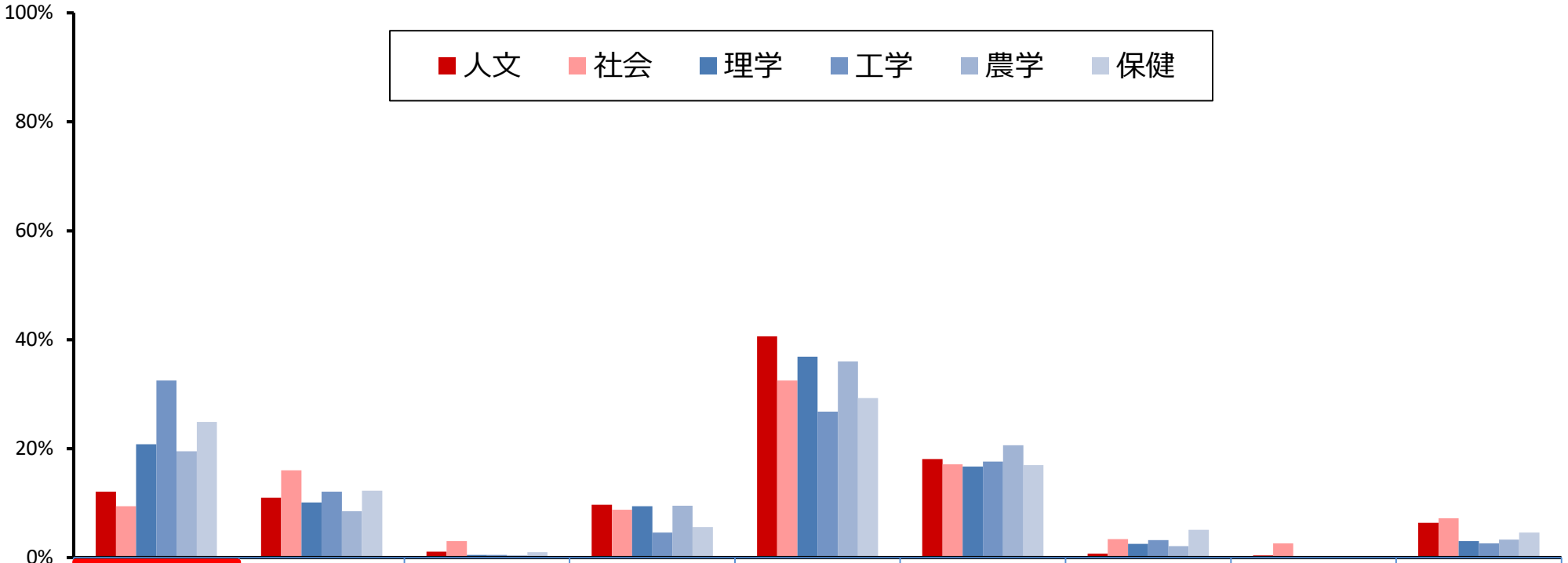
● 人文科学・社会科学系では理工系分野と比較して、教員の教育研究活動に対する業績評価が行われていない



【出典】令和３年度文部科学省委託調査「大学院における教育改革の実態把握・分析等に関する調査研究」（リベルタス・コンサルティング，令和４年）

雇用先の入職経路

● 人文科学・社会科学系では、理工農系と比較して、大学院や指導教員からの紹介等による就職事例が少ない。

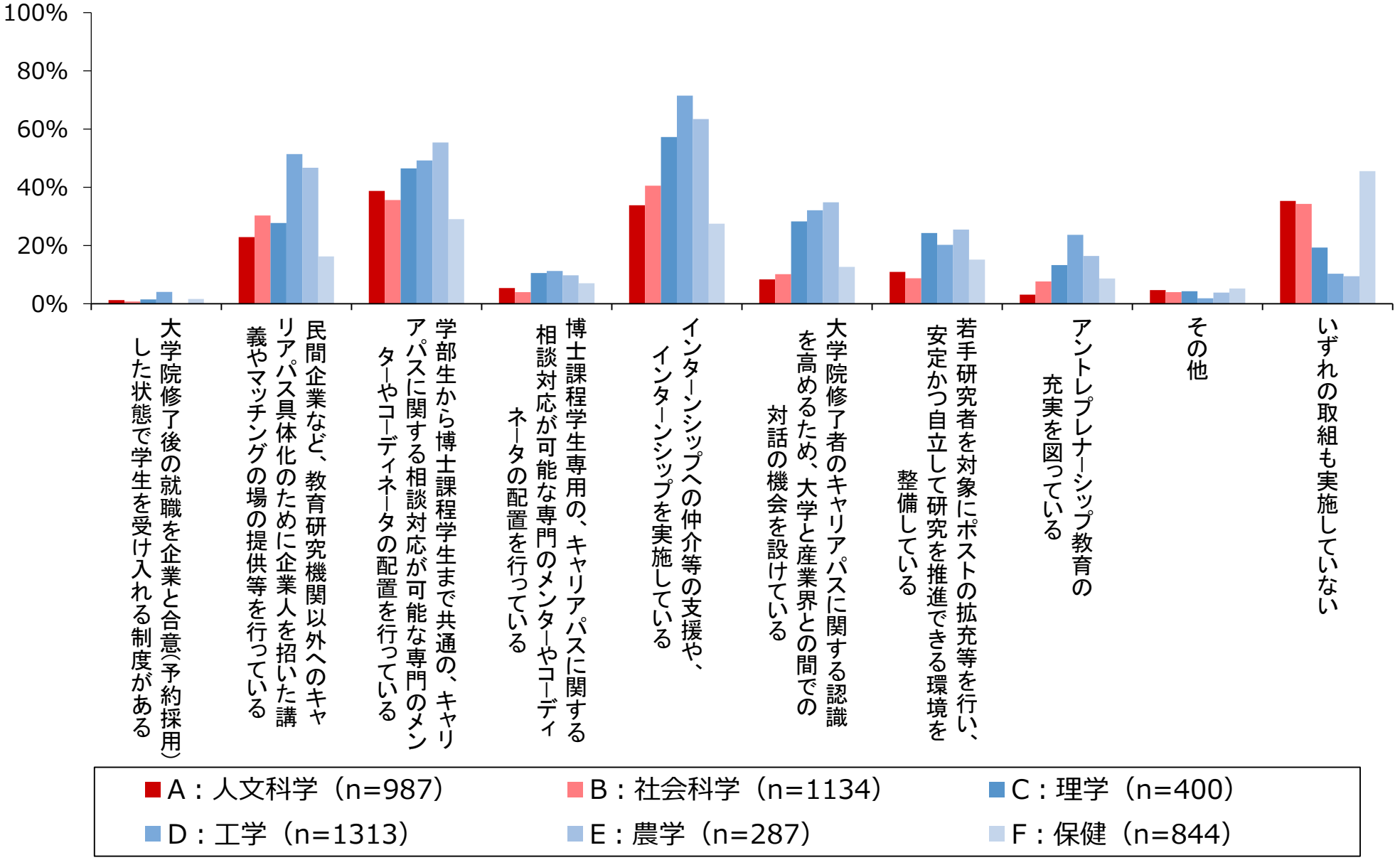


	大学・大学院（指導教員からの紹介等）	縁故（友人・知人等を含む）	ハローワーク等の公的機関	エージェント等の民間の職業紹介機関（大学・大学院を除く）	就職情報サイト・求人用法専門誌・新聞・チラシ等	機関・企業のホームページ	機関・企業訪問	起業	その他
人文	12.1%	11.0%	1.1%	9.7%	40.6%	18.1%	0.7%	0.4%	6.4%
社会	9.4%	16.0%	3.0%	8.8%	32.5%	17.1%	3.4%	2.6%	7.2%
理学	20.8%	10.1%	0.5%	9.4%	36.9%	16.7%	2.5%	0.2%	3.0%
工学	32.5%	12.1%	0.5%	4.6%	26.8%	17.6%	3.2%	0.1%	2.6%
農学	19.5%	8.5%	0.4%	9.5%	36.0%	20.6%	2.1%	0.1%	3.3%
保健	24.9%	12.3%	1.0%	5.6%	29.3%	17.0%	5.1%	0.2%	4.6%

【出典】修士課程（6 年制学科を含む）在籍者を起点とした追跡調査(2020 年度修了（卒業）者及び修了(卒業)予定者に関する報告) NISTEP RESEARCH MATERIAL, No.310, 文部科学省 科学技術・学術政策研究所.

大学院教育改革状況（組織的な就職支援）

● 人文科学・社会科学系では民間企業とのマッチングや対話の機会の確保、若手の安定的な環境の整備等が低調



【出典】令和３年度文部科学省委託調査「大学院における教育改革の実態把握・分析等に関する調査研究」（リベルタス・コンサルティング，令和４年）